

私のシベリア抑留記

東京都 飯塚年男

昭和二十年十月の中ごろ、帰国ということで、集結地の海林から牡丹江に来て、部隊の焼けあとに二泊ほど野宿した。焼けて黄色くなったタンまでソ連兵が車に積み込んでいた。

いよいよ内地へ帰還ということで、海林で我々第七五八八部隊を主に千人で編成された第一三大隊の隊長から話があった。「これからウラジオストックへ行き、船で青森に向かう。前に帰国した部隊に同行して青森から帰ってきた通訳の話だから、間違いない。ただ途中で下車して二、三日使役させられるかもしれないが、そのときははいやな顔をせず我慢して作業するように」ということだった。

乗り込んだ貨車は、日本の貨車より二回りほど大きく、上下二段に仕切っており、窓といえるものはなく、

暗く息苦しかったが、日本に帰れるとの思いであまり苦にはならなかった。

どこをどう走っているのか、何時間も停車しない。扉のすき間からのぞいてみると、どうもおかしい。夜が明けて空が白み始めると、太陽が列車の後方から昇ってくるのではないか。東の方のウラジオへ向かうなら、太陽は列車の進行方向に昇るはずである。

皆、ガヤガヤ言い始めたが、どうしようもない。落ちつかない数日が過ぎて、荷物を持って下車した。降り立ってみると、すでに雪がうっすらと地表を覆っていた。寂しい寒村、クレドールというところだった。

ここは、ハバロフスクからシベリア鉄道で約二百キロほど西の、イズベストコーワヤと北の第二シベリア鉄道（バム鉄道）のコムソリスクとを結ぶ線で、その最初の駅なのか、ここまではレールが敷いてあるが、その先はずされて荒れた路盤だけが残っていた。

この鉄道の建設と沿線の開発が私たちの仕事だった。クレドールに着いた翌日の晩だったか、一枚の日本語で印刷されたものが配られた。『日本新聞』である。

そこには「天皇の祖先は昔、地方の豪族であった」とか「日本一の大地主でどこその株をいくら持っている」とか、私たちには驚くようなことがいろいろと書いてあった。シベリアにおける洗脳教育第一号である。

ここで、がけを削りとりバーニヤ（浴場）をつくるというので、二、三日シベリアで初めての労働をして、テルマに移動した。

テルマはこの線のほぼ中間で、北緯五十度ぐらいのところにある。支部や病院、学校などがあり、この沿線では一番大きな町で、テルマというのは、囚人とか刑務所という意味だということを知ることがあるが、収容所の多いところで、ドイツ人捕虜の収容所や女子の収容所もあった。私が入ったのは二〇九分所、収容所を分所と言っていた。ハバロフスク地方は第十六収容所と言ひ、その収容所長は、ゲネラル（将官）である。

昭和二十年から二十一年にかけての最初の冬は特に寒く、夜明け前には零下四十度を越すこともしばしばで、日中でも何回かあった。

住居も食事もひどく、不衛生な生活で、下痢や肺炎などで多くの人が故国に帰れずに死んだ。この最初の冬を何とか生き抜いた人が、ダモイに結びついたのである。

シベリアの冬は、朝八時前、作業のため営門を出るころはまだ薄暗い。収容所わきの坂道をのぼると、関東軍の防寒短靴も、降り積もった雪が凍りついていて滑る。ようやく日が昇ってあたりが明るくなると、空気がキラキラ光って見える。ダイヤモンド・ダストである。

作業は、初めのうちはまき拾いとか道路修理など雑役で、だんだんときつい作業をするようになった。ノルマなんて言葉も聞いたこともなく、月に一回くらい五十グラム入りのマホルカの包みを四、五人に一個の割合でナチャニック（監督）がくれた。捕虜条約の規定などその存在すら知らず、「うちの所長はいい人だ」など言っていた。ただ、言われるがままによく働いた、一ルーブルももらえずに。

作業から帰って、夕食が済むと、屋外で点呼がある。

十列に並ぶ。日本の軍隊では四列で並んだが、ソ連兵は四人四人では数えられないらしい。收容所に勤める人は、みな予備、後備の元軍人で階級章をつけた将校もいる。所長は尉官で、人事係や作業係は下士官である。将校の所長は別だと思うが、そのほかの人は、足し算、引き算はできるが、掛け算、割り算はほとんどできないらしい。地方人も同じようである。

あまり寒くないときなど、面倒がつて外とうを着ずに出てひどい目に遭うことがある。一列十人ずつをアジン(一)、ドワ(二)、ティリー(三)と足して計算していくのであるが、ときどき間違えることがある。そのたびに初めからアジン、ドワ、ティリー……とやり直す。六、七百人ほどいるので、二十分以上かかる。寒くないといっても零下十度以上はある。屋内に逃げ込むわけにもいかず、点呼の終わるまでガタガタ震えながら立っていなければならない。

この人数の計算は、朝夕の作業隊が出入りするときと同じ、朝はいいが、帰りに作業隊が一緒になるときがある。五列に並び直して入るが計算が遅い。後方の

者は寒さに耐えて待っていなければならない。

二〇九分所は、私たちがテルマに入ったときは内部は荒れていたのので、掃除をし、ストーブを直し、あちこち修理して入ったが、十畳ほどの板の間を幾つか仕切ってあって、その一つ一つに十五、六人寝た。寝巻きがあるわけでないし、脱いだものを置くところもない。それより何より寒い。みな着たまま寝るので、上を向いて寝る余裕はない。頭と足を交互に二列に並んで、横向きになって寝るのである。夜中、便所に行つて帰ってくると、横向きの人が上を向いて寝ているので、自分の寝場所はふさがっていて、ない。この辺かと、寝ている人の間の上に乗って寝る。いつの間に入り込んでいる。大の字になって畳の上で寝たいものだ、と話し合ったものである。しばらくの間、こういう状態が続いた。

シベリアにおける私たち捕虜の最大の関心事は、食べ物であった。少しでも栄養をつけてダモイまで生きていなければならない。收容所から与えられる三度の食事、これは質・量ともにいたって貧弱だから、手に

入る食べられるものは何でも食べた。ヘビやカエルは無論のこと、ネズミでも、名も知らぬキノコや野草まで食べたが、野草など一抱えほどゆでてでもにぎりこぶしくらいになってしまふ。キノコなどは見つけ次第何でも食べたので、中毒で死んだ人も出て、収容所からキノコの採食禁止令が出たほどである。

朝は、パンとスープ。パンはいわゆる黒パンで、小麦や燕麦は上等品で、ほとんどがトウモロコシやコーリアンの粉、ひどいのはコーリアンのふすまのパンで、これはやっとの思いで食べたものである。昼は、パンと生の塩ニシン、包むものはないので、外とうの襟の中に突っ込んで持っていく。場所によってはスープをボーチカ（たる）で運んでくれるところもある。夕食は、カーシャといって、穀物を炊いたもので、ほとんどがコーリアンやトウモロコシである。アワなどは、オーカー（休養収容所）などで出る上等の部類に入る。私は、冬の間、一カ月ほど炊事で働いたことがある。アメリカやカナダからのソ連に対する援助物資の一部である肉の缶詰や昆布、それから関東軍から戦利品と

して持ってきた乾燥野菜。私は食べるはおろか見たこともなかったが、こういうものが入ってきたことがある。そのほかたくあんや梅干。たくあんは大変古くチョコレート色をしていて、炊事係が「こんなものを食べさせたら腹をこわす」と言って廃棄処分にしてしまったが、梅干は使い切れず、食堂の前に置いておいたら、いつの間にかなくなっていた。

この梅干や昆布は野菜扱いで、捕虜の一人一日当たりの野菜の定量は八〇〇グラムであつたと思う。特に昆布の八〇〇グラムというのは大変な量なのである。私が糧秣庫へ使役に行っていたとき、各収容所へ昆布を分けることになった。糧秣庫のナチャニックが、これは何だと言う。穀物でなければ、もちろん肉や魚ではない。カナダ産の昆布で、たしかシーキャベツと書いてあつたと思うが、じゃ、野菜だということになつて、一人当たり八〇〇グラムを渡すことになつた。昆布は一束ずつ縄でゆわいてあつたが、一級、二級、三級と分かれていて、私は自分の収容所へ一級品を渡した。厚さ一センチ以上、幅三、四十センチほどある。

大がまに入れると、ものすごい量にふくれ上がる。ちょっと大げさだが、一人分の八〇〇グラムで収容所全体の六、七百人の一食分が賄えるほどである。処分に困った。

肉や魚はポーチカに入ってくるが、魚はいいとして、肉はちゃんとした形で入ってくることはほとんどない。肉は一日一〇〇グラムだったか、量は忘れてしまったが、骨ごと、中にはヤギの足だろうか、毛やひづめのついているものとか、頭ばかりとか。頭なんかタポール（おの）で叩き割ってスープに入れた。目玉がポカリと浮いているスープをもらった人は、さぞかしびっくりしたことだろう。

ラポータ（労働）は、初めのうちは雑役だったが、寒さが厳しくなってくると、凍土カッパイという、凍った土の穴掘りがあった。暖かいときは電柱など立てられない湿地帯とか、掘ると水が出て導管など敷設できないようなところの穴掘りであった。

砂質など土の質によって楽に掘れるところもあるが、粘土質のところは大変苦労した。やせている私など、

ツルハシを十分も振っているとヘトヘトになるが、掘れるのは茶わん一杯ぐらいである。石より始末が悪い。しかもノルマは一日一立方メートルである。こんなところは一週間かかって一日のノルマは達成できない。

そのうち、だれとなく木の枝とか燃えるものを集めてきて、土の上でたき火をして、やわらかくなったところを掘るようになった。八〇センチほど掘ると、やわらかくなる。何人か共同してやったが、たき木集めが大変で、一日の大半はたき木集めに費やされた。作業係が見回りに来て何か怒鳴ったが、話を聞いて納得したようだった。ノルマも土の質によって差があるようだ。

冬、作業から帰ってから、夕食後、のどが渴いた。塩ニシンとか塩気の多い食事のせいか、水が欲しくなった。たまに湯のみ茶わん一杯ぐらいの水が配給されるが、とても足らない。所内につるべ式の井戸が一つあるが、吊り上げる桶から滴り落ちる水が周りに凍りつき、桶が上がらない。長い竿の先にもりのようなものをつけて削り落とす。凍っては削り落としながら汲み

上げる水は、ごくわずかである。近くの川から馬そりで樽に入れて運んでくるが、みな炊事に回ってしまふのである。

それで、作業の帰りに飯ごうに雪を詰めて持って帰る。もちろん、きれいな雪だが、とれるところは少なく、警戒兵の目をかすめてとるので、ずいぶん苦勞した。持ち帰った飯ごうの雪は、ストーブの上に置いて解かして飲むわけである。

幾つかある兵舎の一つの収容人員は二百人くらいで、たまたみ一畳くらいのストーブが二つある。そこへみんな雪を詰めた飯ごうをのせる。ストーブの上はすき間がないくらい飯ごうでいっぱいである。ストーブの火は弱く、飯ごうの雪は解けるのが精いっぱい、いわば生水を飲むわけである。

パンはトウモロコシかコーリヤン、カーシャもトウモロコシかコーリヤン、それに大豆、スープの実も大豆。こういう食事が何日も続くことがある。下痢しないほうがおかしいくらいである。私も一回、下痢した。下痢はつらい、特にシベリアの捕虜の身では、そのつ

らさは例えようがない。

ソ連の女医さんは、熱が三十八度あればすぐ休ませてくれるが、下痢は熱が出ない。病状を訴えてもなかなか取り上げてくれない。作業場へ行っても、仕事なんかできはしない。隅の方でじっとしゃがんでいるだけである。収容所へ帰ってきて、食べ物はあまり食べない。横になると、五分としないうちに下腹が痛む。シューバーを着、靴をはいて、収容所のはずれにある便所に行く。便所といっても、長い板に丸く穴をあけてあり、そこへしゃがむのである。板の囲いはあるが、夜は月も星も眺められるというお粗末な便所である。

零下三十度であろうと四十度であろうと、板囲いの便所に尻を出してしゃがむのである。痛む腹をさすりながら我慢していつまでもしゃがんでいても、何も出ない。トポトポと帰ってくる。シューバーを脱ぎ、靴を脱いで寢床に横になると、すぐ我慢できずシューバーを着、靴をはいて便所へトポトポと。これを一晚のうちは何回も繰り返すのである。私は、黒パンを真っ黒

に焼いてその粉を飲んだりしたが、よく耐えたと思っ
ている。

肺炎にかかる人が多かった。最初の冬は特に寒さが
厳しく、劣悪な環境のもとで無理がたたって肺炎にな
り、あの頑強だった人が肺炎で亡くなったという話を
よく聞いたものである。

私は、二一〇分所だったか、冬、便所で倒れて、気
がついたら医務室にいた。それからテルマの病院に移
されたが、元衛生兵らしい者が、裸になって体を拭け
と云う。熱が四十度近くあり、裸になったが、拭くど
ころか立っているのがやっとだった。

ゆっくり休めたのか、いい葉があったのか、半月ほ
どで退院したが、入院中、一つ思い出がある。看護婦
が午後、毎日のように注射に来る。それもいつもニコ
ニコして来る。そして若いのである。私に気があるの
かと思ったが、ときどき看護婦がかわる。聞いてみる
と、私の腕は青白く、血管が細くて、注射の練習には
うってつけだったのである。どうりで注射が終わると、
いつもブドウ糖かなんかのアンブルをくれた。

昭和二十一年の夏、テルマの町から十数キロ離れた
ところで、セナコースと言っていたが、五、六十人ほ
どで草刈りをした。冬場の馬の飼料である。九月になっ
て朝晩冷えるころまでした。

炊事場とか草刈り隊の根拠地は、テルマ川か、川の
ほとりで、私たちも十人くらいの分隊に分かれて、自
分たちの寝泊まりするところを川の近くにつくること
になった。十畳ほどの広さの四方に穴を掘り、切って
きた木を立て、横に細い木を渡し、釘がないので、何
かのつるとか木の皮をはいで縄のかわりにして結んだ。
屋根はシラカバの皮でふいた。強風が吹いたらひとた
まりもないだろうが、とにかく小屋はできた。

朝早く朝食が済むと、大がまと砥石を持って、頭
には防虫網をかぶり、手袋をして出かける。この防虫網
の網の目をくぐって小さな虫が入ってきて刺すのであ
る。日中、日が差すとサツといなくなるが、言語を絶
するものすごい数である。

大がまで横に何人か並んで刈っていく。刈った草は
二、三日干して、束にして積み上げていくのだが、高

くなると長い竿の先に刺して差し上げる。これが思ったより重労働なのである。明日の天候次第では、刈った草は全部集めて積み上げが終わるまでは帰れない。シベリアの夏の宵は、いつまでも明るい。

何日かたった日の夕食後、急にいつになく涼しくなった。だれかが「大変だ、川の水があふれている」とどなった。外へ出て見ると、小屋の外は一面の水だ。その水がどんどん小屋の中に入ってくる。みるみるうちに十センチ、二十センチと上がってくる。逃げようと思っても、外は一面の水。屋根に上がるしかないというので、そろそろと一人ずつ屋根に上がった。あたりは真っ暗で、とても寒い。屋根をふいてあるシラカバの皮を一枚はいで火をつけてみると、水は小屋の中ごろまでできていて、倒木が流れてくる。小屋に当たったらひとたまりもない。流れは急で、水は冷たい。落ちたら命はない。小便するにも動けず、一晩命の縮む思いで、ここで死ぬのではないかと思った。

セナコースから帰ってすぐだったか覚えてないが、二二〇分所に移された。この收容所の仕事は、テルマ

の町のパン工場から、水や薪の配達、公衆便所の掃除など、いろいろである。

私はここで、支部のペーチカたき、糧秣庫での糧秣を貨車から倉庫へ運び、收容所へ分ける仕事。パン工場では黒パンづくりの手伝い。器材庫では、バラのセメントや石灰の移しかえ、夏は石灰など体にべとつき、冬はセメントが零下二十度以上にもなるが、靴がはけないのでその冷たさは大変なものである。その他、油倉庫やデッポ（機関庫）などの仕事もしたが、特にデッポの炭車からの石炭おろしはきつい労働だったし、危険も伴った。

大きな炭車の下のハッチをあけると、石炭がザッと落ちてくる。それをシャベルで後ろへ払いのけるのだが、炭車はあとからあとから何両もひっきりなしに入ってくる。はねた石炭は山のようになっているが、滞貨車料をとられるのか、二十四時間、交代で働かされた。冬は、石炭が凍ってハッチから落ちないので、上に上がってバールで砕いて落とすが、石炭と一緒に落ちて大けがをする者もいた。

この二二〇分所は、私のシベリア抑留生活の中で思
い出の一番多い分所である。つらいこともあったが、
今は懐かしく思い出される。

二二〇分所にいるとき肺炎でテルマ病院に入院し、
退院すると、どこかの分所（二二〇五か）で薪用の伐採
作業をし、それからクレドール近くの百何分所だった
か、ここではワクター（衛生兵）の仕事をするように
言われた。

朝は、各方面に出かける作業隊の人数の確認をして
見送ると、夕方まで休み、また帰ってくる作業隊の人
数を確認し終わると、明日の作業隊の行く場所ごとの
人数を近くの警備中隊に報告に行く。そして夜の十二
時には、収容所の下の方にある駅に電話をかけて、収
容所唯一の時計を合わせる。ロシア語も、単語を並べ
て話を通じた。今はすっかり忘れてしまったが。

この分所でビスカンボイ（補助警戒兵）というのを
した。腕に「BK」と記した腕章をつけて、カンボイ
（警戒兵）と一緒に作業隊についていくのである。カ
ンボイが足りないのか、草刈りに何日か行っただけだっ

たが、暑い日差しの下で仲間が草を刈っているので、
少し手伝おうとすると、カンボイが「お前はカンボイ
なんだから、ラポータをしてはいかん」と言う。ただ
立っているだけで、仲間の視線が痛いくらいわかる。
嫌な仕事だった。

昭和二十二年の暮れだったか、テルマの北のモシカ
かどこかの収容所で身体検査があって、オーカー（O・
K）というので、休養収容所へ行くことになった。こ
こは労働で疲れ、やせた人を休ませ、元気な体にして
また労働につかせるところで、ラポータはなく、所内
の掃除か、冬はストーブの薪取りくらいである。給与
は一般の収容所に比べればよく、パンは、トウモロコ
シなどでなく小麦か燕麦、カーシヤもコーリヤンや大
豆ではなくアワやエンドウ、肉なども質はいいが、み
な量が少ない。

私はこの収容所にいる間にまた肺炎にかかった。今
度は入院はせずに医務室へ通うことになった。元下士
官の衛生兵が、湯のみ茶わんほどの大きさのびんの内
側に石油かアルコールを塗って、マッチで火をつける。

パツと燃えると素早くびんを胸に当てる。中の皮膚がブーッと盛り上がる。これを五つか六つ当てる。お灸のようなものだが、こんなもので治るのかと思つたが、一週間ほどで熱も下がり、治つた。

ここのナチャニックは女で、将校だが、印肉を口紅がわりに唇に塗っていた。そういうえば寄せ書きの日の丸を頭につけていた女を見たことがある。化粧品など全然手に入らないのだろう。

この休養収容所に一カ月ばかりいて、今度はさらに北のヤクドニアの八百何分所だか、伐採が主の収容所に移つた。二十三年の春ころである。

伐採は、馬そりで木を運び出す関係で、雪のある冬にする。ピラー（のこぎり）、タポール（斧）を使つての力の要る、そして危険を伴う仕事である。

作業は、木を切り倒し、枝を払つて焼き、一定の長さに切るのであるが、ノルマの関係でいろいろと無理をする。細い木では能率が上がらない。三十メートル以上もあるできるだけ切りやすい木を選んで切るが、なかなかそうもいかない。

大きい木は、なかには枝の根元が二十センチ、長さが十メートルもあるのがあつたが、それを雪の中、どた靴はいて枝を一本一本担いで集めて燃すのである。ノルマ一〇〇％でも大きい木を五、六本は切らなければならぬ。雪の上で生木を燃すのである。なかなか燃えない。一本一本枝を集めて何カ所で分散して燃やしてなどはいられないのである。

切り倒した木の先をなるべく一カ所に集めるように、右に倒れそうなのを、無理してくさびを打ち込みながら左の方に倒す。枝がからみ合い、折れて落ちてきたり、思わぬ方向に倒れることがある。倒れるときは「いくぞーッ」と声をかけ、走つて木から遠ざかるのだが、見ていると、雪の中を、のろのろ歩いているようにしか見えない。

危険を伴う伐採だが、ノルマは一〇〇％で十五ルーブルである。他の製材とか大工などは十八ルーブルとかそれ以上である。おかしいと思つて聞いたことがあるが、山で木を切つただけでは何の役にも立たないが、運び出して製材して板や枕木にすれば役に立つ、机や

いすや、家を造ったりすればさらに役に立つということとだったが、納得のいく論理には思えなかった。

昭和二十三年の暮れ、待望のダモイということ、残留組に見送られて貨車に乗り込んだ。着いたところは、およそダモイとは関係のない、葉の落ちた曲がった木の多い寒々とした収容所であった。ここで薪用の伐採を一カ月ほどして、この第一分所からハバロフスクの第二分所に移った。ここは大きな収容所で、各地区からいわゆるアクチーブを集めて、収容所で宣伝活動をするため二カ月ほど教育する講習会場や、れんがの建物もあった。

二十四年四月の末、『日本新聞』に、イズベスチャだったか、「今年中に日本人捕虜を全員帰還させる」という発表の記事が載っていた。

ダモイの望みが出てきたものの、この収容所のラポータはきついものが多かった。大きな丸石をハンマーで割るのである。ヘトヘトになるまでたたくが、ちっとも割れない。一緒に石を割っていたポリスカーロフのような大きな囚人が来て、「ここをたたけ」というし

ぐさをする。そこを日かけてハンマーを四、五回打ちおろすと、あら不思議、ポカッと二つに割れたのである。石の「目」というのがあるような気がする。それがわかるようになる前にはほかの作業に回された。

ハバロフスクの駅で冬、小麦などを貨車に積み込む作業をした。十人くらいで一組になってするのだが、六〇トンという大きな貨車に、七〇キロの小麦の袋なら七〇〇袋も詰め込むのである。零下四〇度になっても、ラポータ禁止は輸送作業には適用されないというのである。高さ二メートルもあるタラップを、ぼろ手袋をしているので、袋の端をつかめずただ背負ったまま担ぎ上げる。塩の九〇キロの袋なんか担ぎ上げるときは、背骨も足の骨も折れるんじゃないかと思った。

夏、アムールの川岸でトラックに砂を積む作業をし、帰りが遅くなることがあった。対岸は満州、小興安嶺に沈む夕日を見たりして、六月が過ぎ、七月、八月とダモイ列車が何本もハバロフスクを過ぎていき、九月も末になると朝晩はとて冷え込み、私のダモイはななく、とうとう十月になってしまった。

『日本新聞』の編集者たちも帰ってしまい、スターリンとかモロトフ、スースロフといった連中の本の抜粋を載せているだけで、何の記事もない。「今年中に全員帰還させる」というのは、どうなっているのだろうか。また寒い、つらい冬を越さなければならないのか。暗たんたる気持ちは例えようがない。

ソ連は『日本新聞』に、「ダモイが夏だけなのは日本が船をよこさないからだ」、次には、「船が来ても港は凍っている」、ナホトカなど不凍港だということがわかると、「陸の砕氷船はないんだ、厳冬の貨車輸送は危険だからできない」、と言っていた。

昭和二十四年十二月三十日、私は名前を呼ばれ、明るく二十五年一月一日、ハバロフスク駅でダモイ貨車に乗り込んだ。貨車にはストープが持ち込んであったが、パンは固く、車内はあちこち凍っていたが、少しもつらいとは思わなかった。

ナホトカで日本海を眺め、あの向こうに故国日本があると思いつつ、船の来るのを待って、二月初め乗船舞鶴に上陸した。